
 学 会 記 事

第 68 回新潟癌治療研究会

日 時 平成 20 年 7 月 26 日 (土)
 午後 1 時 30 分～6 時 30 分
 会 場 朱鷺メッセ 新潟コンベンション
 センター 中会議室 301

I. 一 般 演 題

 1 放射線化学 (DOC, CDDP, 5-FU) 療法が
 著効した進行頬粘膜癌の 1 例

小玉 直樹・藤田 一・池田 順行
 小林 孝憲・齊藤 正直・小山 貴寛
 大貫 尚志・永田 昌毅・星名 秀行
 高木 律男

新潟大学大学院医歯学総合研究科
 顎顔面口腔外科学分野

広範囲に進展した頬粘膜癌に、放射線化学 (DOC, CDDP, 5-FU) 療法が著効した 1 例を経験したので報告する。

症例は 75 歳, 女性。

【主訴】右側頬粘膜の腫瘍。

【現病歴】3 年前から右側頬粘膜の腫脹を自覚。1 年前から同部が隆起してきたが放置。近医内科受診の際、精査加療を勧められ、某病院歯科を経由し当科を受診。

【現症】右側頬粘膜に 20mm φ の外向性腫瘍を認め、上顎歯肉、硬口蓋正中付近にかけて表面顆粒状、易出血性、硬結を伴う潰瘍を認めた。

【臨床診断】右側頬粘膜癌 (T₄N₀M₀)。

【病理診断】扁平上皮癌。

【処置および経過】新潟口腔癌化学療法研究会のプロトコールに準じ、DOC, CDDP, 5-FU の 3 剤による化学療法 2 クールと放射線照射計 60Gy

を施行。1 クール後、腫瘍は著明に縮小し、照射終了時には腫瘍の消失を認めた。副作用に好中球減少、食欲不振、脱毛、口内炎を認めたが、G-CSF 投与等により回復した。

2 前癌病変である口腔白板症の癌化に関する検討

佐藤 英明・田中 彰・上田 潤
 山口 晃・又賀 泉*・岡田 康男**
 日本歯科大学新潟病院口腔外科
 日本歯科大学新潟生命歯学部口腔
 外科学第 2 講座*
 同 病理学講座**

【緒言】口腔白板症は口腔粘膜に高頻度にみられる白色病変で、擦過しても脱落しないものと定義されている前癌病変の 1 つで、数年後約 5～10% に癌化を認めると報告されている。そこで今回、白板症の臨床病理組織学的特徴を検討し、悪性化因子の解明の一助になることを目的に検討した。

【対象と方法】1994 年 1 月～2007 年 12 月までに白板症と診断された 92 例中、悪性化した 7 例を対象とした。検討方法は WHO の分類と日本口腔腫瘍学会の提唱する SIN の分類を用いた。

【結果】臨床型では紅斑混在型が 5 例と最も多く、上皮性異形成は全例に認め、WHO 分類では全例が moderate, SIN 分類では SIN2 が 6 例で SIN3 が 1 例であった。1 例については術後に遠隔転移を認めたものの、全例局所制御は可能であった。

【結論】悪性化した白板症の全例が SIN の 2, 3 に該当し、予後判定には SIN の分類が有用である可能性が示唆された。